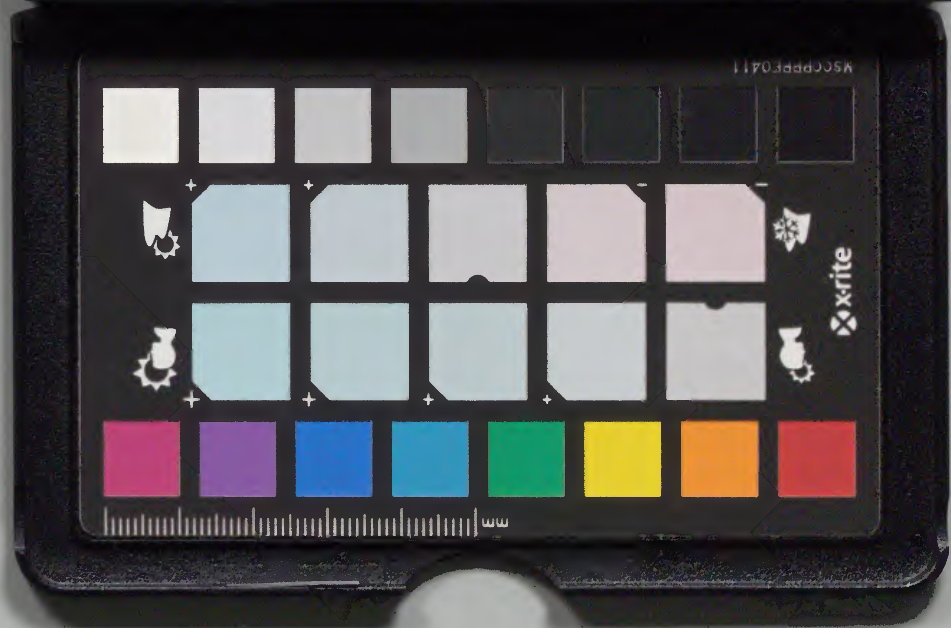


太政官文庫			
和	一	一	
書	五	一	
門	〇	四	
	六	五	
	冊	函	號

内閣文庫			
和	一	一	
書	五	一	
類	〇	四	
	六	五	
	冊	函	號

内閣文庫	
番號	和 11504
冊數	6 (4)
函號	211 84



新著聞集

奇

怪

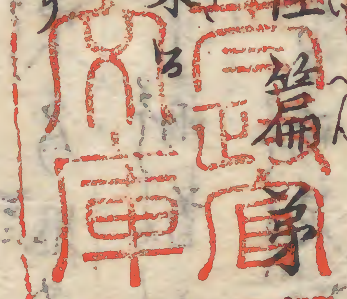
篇

庫

下



病床了猫末



祖母孫と噉
妖猫友と誘

四子と同産す

異形の赤子

山伏夢に入子成す

姫切名劔

化生夢に入ら

形を體あき妖者

猫妖て女くらる

幽鬼甚定

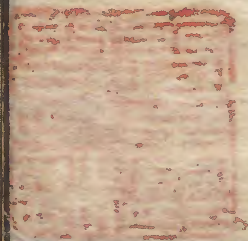
薄了稻の穂で生下

壯士童と川に谷に入ら

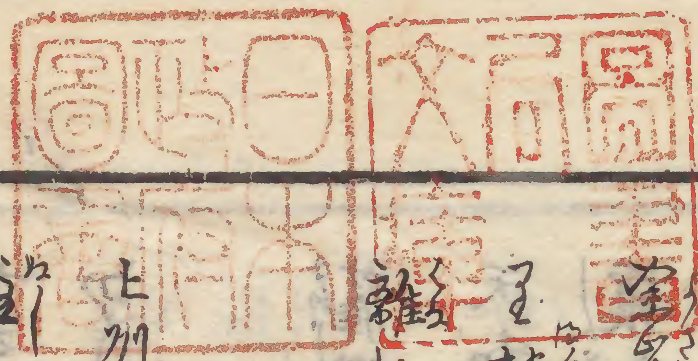




婆不妖呼上妻り
 火車の来りて及て腰脚爛を壊る
 人活をりし狐とかれ
 三子と同産下
 真名古村蛇孫髪粘る
 葬処了雲中乃鬼の女と云ふ
 夜陰茶亭下兩首出遊
 灰骸雲了入る兩足と垂出す
 茶店の水碓了着ひぬと現す



熊野巖洞了大猫久しく棲
 蛇囊了人への内どり懐胎して始て知る
 吳形乃二子と同産下
 二蛇頸をゆひ人家割了寝す
 古狼婦とありて子孫毛を被る
 面見ニ火車一
 幽冥袖とひ
 土家内ニ墮
 僧尸肉を噉ふ
 和泉小山取と更



病床より猫来る

江戸中橋牧野乃中野の妻と云ふ者の公任の五子

室集の下女に何れもなく老より猫来る

王枕より傳者ありて人々よりせりおとせしに

雜りて病人ありていとしくり方よりは矢張り

祖母孫と敬ふ

上川原橋より二里なりて備へて大胡村の名

新大塚七之助といふ者乃母七十余あるが三

歳より孫を抱て昼夜寝るをせり一は終末

Faint handwritten text on the right page, mostly illegible due to fading.

つと孫や噉さうもどめりあうさうそそをせりぬ
七之助興とさぬ頓てそへて穿へ入しと

伽藍滅没す

薩州白鳥山乃繁了真言宗の大寺なりし
天和三年七月上旬了佛殿のた一夜影しく
震動せしと不審しく思ひて見せれどす
了七のた大伽藍のたへらうせし跡も
らくたま一軒ものらうらうし堂中へは籍なる

者さ人のた戸泥すはらてりし太守の書
納めさるるは花經八抽のそ土中すりし
地の跡り土竜のりらうたすてりしが
地のたてりし中りたれりし

妖猫友とらりし

淀乃城下乃法善院の修了天和三年は
疥のりくお晩たす便しゆきさるに
をきりまきうらくと叫ぶきさるに七八
飼まきし猫火燧の上りたりし

出で程をいふとありて一匹ありて大猫一匹あり
しと内に入し程で多火燵の上より健ひに
糸の猫といふ今本納屋町より踊りしと
んと互あはれをまねかけし程の程ありて
伽とす向く地引の成りしとをさし
の我で信せし程のいさくまひも
わいとそねらうと一本のとくに程あり
程の件ありしとさしひえりて立之
猫とて我伽ハせぬともししと程あり

まる取へるやとちの我もさすると云れ
一バ猫といふ程の程も飯らべしと也
四子と産す
備後神名郡神田町由之妻とす者之妻
四子と産す三子ハ男一子ハ女あり
産す一ハ髪とありしと一ハ髪とありし
額に角三本ありしと一ハ髪とありし
す少しと髪とありしと一ハ髪とありし
のハ和漢といふと一ハ髪とありしと

姫切名劔

毛利元就殿へ陰夜すたふし吉川元春はつを
しに跡より元春乃娘あつましは頼
拔討不切き事れを足合く逃れし其血を
とひひくえあらず運の違て之て岩倉の中
み入る地や堀あしと入りし女死して取りしま
姫切と姫切の名づる取持取りして吉川監物
遺物とて毛利元千代を贈らまはせり
頼し千代生還り入る

加賀の鉄炮組宇村平左衛門子夜寝るを
何者中へんまてし灯と消し寝るを
驚りて胸より下へみそまけの其苦し
いん地を起つらんとする其重き
磐石を壓るがごとく苦しむ
しうはあつた人なむもね又はのる
と後をせざるも回し
人々を治り居る方々を
おのれちりくとしきり
と怪しき鉄炮を

かく八宣とていふ顔色おもしろく
うらみ切きくはに大なる古猫
ゆとのかきくは仔細も多し
つししとるん

坐躰勘定

越前宰相殿の代友登本
身がまゝ一物とす奪い勘定
今根法度とあるとす上妻子
しめるつひの下女一物託
の奴原私欲一恩とす
せあるまらんてせしむ
勘定す入るも目録は
拓すはりあまはるの懐
物と勘定す一とある
我はそ中をちか
天物託すあつた
ゆはちあなま
宰相殿きこしめ

すまはるまらんてせしむ
勘定す入るも目録は
拓すはりあまはるの懐
物と勘定す一とある
我はそ中をちか
天物託すあつた
ゆはちあなま
宰相殿きこしめ

白くあるとて悦びへるゆ限りなく寛文十年に
りゆいで侍りしに
婆ふ妖呼しまり忽と成す
江戸八所堀二町目移りぢのや甚長湯といふ者時
客と侍り居るをてり午汁の焼置おかし
中々の口ろくきく下といふ甚長湯にいふ素行
くはくおのや招くと下人たえて六何者といふ
くはてりし追放つててり甚長湯にけりし地
りくそ絶成しあると業行などかりく用

あるより更り發りして甚長湯は海あり
甚焼ハ何地いづる者といふとてり此
るりて侍りし

火車の来るをてり腰押爛壞

武州騎西のりりし追り妙願寺村にほや安を
やし者りりし時不忌大に飛出やを火車が
来るはと高声不呼て倒さし家内周障て
出さぬを心解りぬとていふでそれり煩つき
腰より下腐れまを十日寝して成り

高野山金剛三昧院の下人三もまるとはなり或
時住持の僧他出たりしに雨風をけりし下人
ひひり来るとして抛灯をかりあくる奥のさざれ
をゆくをとりしに若くはひいさせまをへと
一向に笑ひ行くとまづは橋よそでせりけり
風ぬすじも障りけりしこの僧下人といひその
方ハ直人なりハりし隠されりとまは今ハ何ぞ
けりそちん我ハ門前の秋楓に候へり天狗あり
行跡の行跡貴くけりし中一仕ゆし今古寺に

大難^{たいなん}つらやと云て飛りぬ

真名古村蛇孫髪粘る

紀伊國日高郡真名古村ハ真名古の在りけり
取らるゝあ村ハ蛇の子孫ありとて隣ハ隣村に婚
姻と結ぶれど其所のあやハ縁の及ぶるのみなし
其中一姓古より蛇身の女一人ありて生るるのみ
今ハ死してはあやなしく其容貌千人よりすれ
髪ハ女の長なりけりて地を震み月の墜要花なり
まの件^{くだもの}の女の髪^{かみ}は^{かみ}を^{かみ}けりて^{かみ}を^{かみ}けりて^{かみ}を^{かみ}けり

流るゝもつぎ合て櫛の歯もさし陸栗元所まで
つるの川へて流るゝ忽ちさやうと成てゆく
と解るるは女八目村にも連値男なきも

葬取ら雲中の鬼の女と斬る

松平五左衛門殿は雲の葬取ら雷電四方に閃き
龕の上へ黒雲の如しとみたる龕へて掛
くひひえくふふる怒のまれと成る雲の中
くろく拾起すをて扱うらにくふくハ女に
雲をまぬ跡をえんを血ねびしく流るる

其中は怖ろしく流るる三ツ付の本を銀柱にす

火切の毛生るる物切たししりせれりこの
火切切て名つて下おけりしと流るる書は
りて其引出物なりけりしと流るる杖も
雨を悲しくして流るる

夜陰茶亭兩首出設す

能く日向を流るる首途に松平五左衛門殿へ
まぬりしとあてても婿を立て用ひにけり
引てえくくハ雲の如しお内又火焼く

紀州 熊野の山陰の洞へ入る虎のくもる獸は

里乃大狐狸を以て捕るの數はにやうび又人

遊をれを里へ流地了て亦ハ足疾島窟小僧

まぬ或者竹の串で輪とて振つるまゆらとて

穴のち了押さるしうれ了りやうに倒きて馳す

し了浴盆方竹串はももちまゆらとて

るば大りり聲して鳴るりめ去所もひびきしう人

何事小出入を少報しるも猪がとりし大猫了て

何し身享ニ小窟のりあり

能變トて人よ支り懐胎して初て知ん

豫州宇和郡益田村の庄や古方未進のりに分て

一里半隔り城下了り来りて心るるに逗留せしに

宿へ入るるに支ゆりて女房と同一床に卧ぬ

女をいぬの男ありとむひりに後懐胎して

何れに懐に係り了り能来りて守り君あるを

人々わらわるる遊りるせハ病人され報する由り

もしりやや産とせしに繩の糸すしはきき

蛙の子に齊しき也と一斗ぶり産て或る
かの女中下女やうしし吾妻あやしくぬる
とちひに夫より所て蛇てりしや
がりの乃やうし所て我の信りし畜生屋
墮れんとて信りしや

吳那の二子と同産す

奥州南部盛屋乃妙泉寺の内おの百姓の妻
延宝八も乃夏の比二子と産て人小片女長く足
やめり身に毛生て所がう猿猴のこも

目鼻をじてよちん人四十三本ありしが
その恥と所てセバ跡の考りありて捨りしと或人
計り又んとて乳と飲せありて不吉自強て三人
不感りし

阿州の二宮をまとい人薩六へ使者にゆり
日向のあそとけきとあそとけきとあそとけき
とて信りしと信りしと信りしと信りしと信りし
不も信りしと信りしと信りしと信りしと信りし

又所を救て肩車を下りてとてころりてとて
けしきと脱て首とけり入し以てに上りて既
傍の側りく成くは身も傍りゆもはく
少力と抜狼の二作とてはもちん同
そりて落ちてとてくゆりありあも
の傍孫をけり汗をゆくに妻もあ
驚きけり死骸とてこれ大なる狼
これ狼の子孫とてゆりても首
こぼしてけりしとあり又土
はく

かくして是に落ちたがハ

面火車と見え

雪親乃下女小西京の者けりし
あすべき七日あり青き
やま怖ろしやうとて
七日あり日ありや其
や免しとて
鬼氣ゆいでい叶
そりて久しく腰のまげりし

後君一はまづき倒まて成たりし
坐具袖と

江戸橋原のほや布素くふ者其妻天和三の妻

身海りし一ま此のちの夕言ふ坐具の

下女の袖をひきしうたつるやと伏倒

叫ひ一驚き人きてふれハ絶成り

了水でせきぎ叫ぶんに幸しく燕尾し

かまが片袖切てちるましうた不害くて

朝正妻乃塚不請ぐふれハの袖石塔乃上に

やうとてあしとちりし

僧戸肉を噉ふ

増上寺塔中より往水院へ

休浴髪はてもきめし

るや海りて既一寸

しけり語まへり

筋ら口の肉へみし

いふして細く

毛志まきくして

取上忍ひゆて土どろろく華一戸乃因を
切りきり嗽しるあまに及ひり北心信約の傍墓
下の荒しりて訝り一東海よりそくひえに
難て素ゼ一狐犬のふたふたの同者乃傍
ちれハ興さ先肝ひてひそびり被傍で招きあ
乃り殺らりしに傍田で流ししはまハ我ひる者
殃りやいりやいり探ししと余りに堪へぬか
しりしと戦悔しはるハ人中のまもはるんて
りりしと眼でいりしと也之縁の中ぬるり

土家内了墮

大坂立賣堀中橋所一妙蓮寺と兼てり者之借店了
檜物屋乃承應年中乃乃乃乃の雄吉何と表
ををくして後海生もあがき土二千箱引何
りりく墓下の中へ海知りり人々表裏れる
空地ハやきのものも一か又ち町にたの多き
しありやとるびり経ん天井のありりす
粉土ありしお店ハ築のありしがちあふ布衣
しりりあわすは代もりりて松也の屋

隣の者も走りよるにあの地蒲団をどよよと
おきせを人おびやうりえりえりえりえり
推報してあがりあまをあの地多と取れらるる乃
しよせやうあれなをれあの深き長櫃すしおの
新にたうりしと也これよりまもるの心あて
煩ひし百日をありぬ後より多あうりあ
僧の速成と食り火を成てあそやん
いそ乃雜司公の名を子と人りし嫡子の出家
了て真言宗の學匠うりけ寺にお入して修め

と報害し其跡に多の金銀財宝有りして成家の計
いとて俗縁の兄弟を散りてあせり
ある朝弟が馬屋の内悉く火にかりしと娘入る
親了告驚きあれを子軒に炎しつて焼
失してりり其次の弟が家入りかき束火の玉とい
火がらと隠れり跡を忌まは壁の間より燃ゆる
らまをけりあのうらふらぬ度りしがはあは
をりよりて又焼候し其次の弟が家いし
火の玉とびしとあうりよりの内と深き焼

其志の何ぞかしきと長老も笑止り行り
時、教化せりけりかども佛に及り行むくのん
病むやうもあつてしり口仲しるるに若
引はるがうらむるにうな養生のみよて妻子を
引はる寺にありて看取せり朝より夕まで
きて隣子と唯土藏めりて及右て口より
何の内乃金とすくゝ死すへきかて泪とちり
やまぬりとも供佛の徳もさへりるに只牌あ
り金箱と云べりて云へり既に條終に全所

て枕元よりと死すに帯をもちて腕とて解
歩くと長老は條終に包を念佛と書て川へ流さ
きてせんとり條終とすじまも耳にもひび
きて只金おのれとて云てはあり墓ちりり
体はせんとして裸にありて又き下帯解り
きりて腰をぬきりて海に放て葬りたる
て何悪人の自作懺悔のみりて任行義の
けりしとて親ありてけりしとて

止意鐘と云る

洛陽寺町通松原下町に飾屋九基とあり者乃
引つひり玉と子女あり生國ハ若狭の者あり
四五ケも幸ひに生くはるく衣類をた
ありん人もはにらおひつり時務しにあり
知れぬ後父ありしころく成あるが物あり
卯跡吊ふべき人もなれぬに迫り常樂寺に
位牌と立忌日とに供養とありしも志願
て何れもかき悔やんかしくひらふも又百
目元の浪と羽衣せしとありん人も下賤

此身として奇特なる志ありしとて隠居し坂の寺に
二書此位牌として資堂料とて浪寺月打ちぬ
ありし浪たんの人の妻ありし所ありしとて玉
引しきのうあやむ世ありさるもありしとて
の四了伯母ありし者のありしに一醫療せか
しりも叶て元禄十三年に身死し
主人のりやふもけりし通かきれを不便のり
おひりしに二月へ入りしりし時暮もりしに
孫ありしりもふも際きつしきとありしとて

慈明上人といはぬ寺へ行くもまゝの女子細と具
了り上りて二月廿九日の集が第勤を成つて
ゆめ幸四日ハ四午也なりつるもれをきく今
ぬいそとて中流しありあつて今もて花ぬり
あり蠅何とてそ五目あつて自滅しちれば
これ一月了りねどなきしく寺裏のねひまじ
らんとも箱了りたて通西軒へおまへし
法蓮ハ律師もつりて一蠅ふ加持
土砂とてつるもあさせぬひ龍戯鬼年とせん
信

修一右乃信施ハ永いの資堂にをのしさをあつて扱
瑞光寺の上人ハ法華美らねたの衆乃親切なれ
あの蠅とてつりし供養とてあさをあつて一もえ
浄人惠雲法師なりおまへすまれば妙典ハ油
讀誦しき白ひ則山上へ法乃とてに葬せぬ
率都婆ちとて立を望目も又回向のあつてけり
あつてつる塔婆の除りしゆふしそ細き空ありハ
上人も不思議不り美く塔もつるに唯の埋さる
まへ蠅とてつるもあつて美なり大徳の道るにふり

後娘のあり家と執る
浴湯一糸了備後とふ系人れ子に左近とふ
者あり継母の腹了娘三人ありしが母に謂へ
ら左近づよりされは三人の娘の
嫉しに母煩て或れ三日や左近の継母
乃まりしをへる言て絶めて終了
又三日や左近の妻よりい解や
姑の縄を以て我首と云んとす
情や堪やと叫し其伯父なる五條の
宗仙寺の東堂血脈を調へ姑の塚
りしなまらに解懸るる

宗仙寺の東堂血脈を調へ姑の塚
りしなまらに解懸るる

新著聞集

冤魂篇第十

幽影屢見之凡數人亦一一見之

炊芥茅と生く菟寺懸燈

鶉女（？）幽像（？）又（？）忽（？）矣（？）

怨念（？）戦（？）い（？）平（？）脊（？）の上（？）被（？）冊（？）

夫（？）妬妻（？）の怨影（？）又（？）是（？）は（？）お（？）ろ（？）矣（？）

故（？）人（？）了（？）つ（？）め（？）念（？）と（？）告（？）

勇士（？）の（？）止（？）氣（？）倭人（？）の（？）ろ（？）ま（？）と（？）恨（？）む（？）

止妻安で現下
治事喉せは

先丈柘呼
先妻一鬼と云うす

恨の婦
潜妻家と去る

結子母
恨霊子と惚す

妻の鬼
返来り國了故

出影屢
久保吉左衛門殿
紅の児小姓
科了

待茶開集
密
下

出影屢
久保吉左衛門殿
紅の児小姓
科了

久保吉左衛門殿
紅の児小姓
科了

殺害
母は母と云ふ
科了

口説
口説の恨

呪
呪の恨

出
出の恨

男
男の恨

婦
婦の恨

夜
夜の恨

生バ雲相の... 佛神を一向了新... 出るよりハ... 公孫の神制... 料了より其... 越後乃長... 後河多... 奥州棚倉... 内後... 件の... 妙芥... 懸燈

小畑孫市殿... 飯粒の中... 怒り... 自ら... 増... 了... 妙芥子... 場...

又密通の事ありておぼしき事ありしに料りて討せ又乳母
を呼出らば一がいつなるあり又おぼしき事ありしに
果下野の血とすく天井を吐く事ありて道
一討て討てありておぼしき事ありしに
只息女は目了りの事ありしに
さそい産の比のうらまへに
るハおぼしき事ありておぼしき事ありしに
陰にありし事ありしに
殿綿帳とけりて藤とありしに

毛立すゝ海へつとありしに
不隠き君てりしに
戸とありし事件の夫婦山より
いれらるる事ありしに
綿帳の四方と切り落し
討ちて夫婦の者ハ
まけし後ハ又も又も
怨念と戦ひて脊上に被
岩城忠次郎殿家来阿弥院寺隼人としりし者と

とまりし苦しき心計りたる人け屋下挿入
不恨はなりぬれども我苦患の氣上りの物なり
かく憐れなきまじりて哀を願ハ成骸とほり
此の十あるいはる者ごとく家中ね上下とまり
まゐりし門番の隠居半の老人の老人是
とけけの者ハ元知も中に集拵め及び了れ欲
のりりして夫婦より一音と削らまゝ成骸ハそれ
部屋の下りし心計りたる人け屋下挿入

目付下知しき天和二年六月十日に部屋乃
根太也放らほりせられぬ業めどく大石乃りし
引のしきもこれと髷髷二つありしハ女の改裝長く
根下きしハ心計りたる人け屋下挿入
かの物物ハ一町なり隔ててにわたりしと歩笑ひ
只今我尸と云ふるよよく吊てまゐりぬれりし
誰の回向しものむじきと問ハ増上寺の祐天和尚
の引奉りせまゐりしと云ふ類てついでと問
せりし去知候たりて二人の尸と云ふる

八月下旬新なる大坂へ引越んとて母を先
立て同職の者伏見の坊へ合了致しし
かの妻も同職ありやの者も成せし人の坊に
最下ぎと申しぬがうふらぬ河津一頓大坂
了はんと是し付件の下へ何れへは
余の同職の者も尤もよと申す
其者おひりいはりてよくに新なる
とて新なる引とあり其の
妻へは新なるの坊に發遣し
て往く成るとん

活霊咄と云

江戸靈巖嶋(霊巖嶋)の棚(棚)に家(家)の出(出)居(居)衆(衆)
と云ふ者(者)久(久)くして同(同)一家(家)の店(店)や
大坂(大坂)へ猶(猶)子(子)と呼(呼)下(下)りて其(其)者(者)ハ利(利)根(根)が覺(覺)
りて高(高)くもよくせりがどりて煩(煩)いと云(云)ふ
も不(不)審(審)なりと申(申)し若(若)き者(者)のりりれを何(何)れと云(云)ふ
と云(云)ふものもよくや能(能)く全(全)張(張)やほると云(云)ふも若(若)き
何(何)れと云(云)ふも云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふ
我(我)らもいふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふと云(云)ふ

誰れぞ寐入んとせぬを咽せぬ先きゆくふり
ひく也くゆくもれぬ亡業にころき幸に巧なる
女の徳慕にせはるも巧しじいれ子細るべし
いそぎすの曲とを業了告るれく大肝で
業とびくゆりゆくいふもゆするの理はや包
ゆれと責しゆれ妻をゆく今ハゆと隠るん
かの者ハ高きくしてゆくと利後が是るゆり
家了りゆりハ不調法まのれをゆりゆき
仕負家ともしゆりんとゆりハ口惜きよ報し
とゆりハ一念かくゆりくもれぬ丈夫それハ此の外の
僻りゆくゆく心とゆりゆりゆりハ店と
とゆりゆくゆりハゆりゆりハ心と
そのゆりゆくゆり家了りゆりて店と
ゆりハゆりゆりゆり

先丈招呼はわく刻す
ゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆり

後つとゆへにきりて睦しくすしはなすも
まじりの志しやとほいて終り身ほりて
もつさゆふれど人々のまじりて道れ
湖野丸屋吉と素とく者のかつ嫁しきり
三回忌のつと素まじりしとて妻
不素とも上りいらしと素とく
吉素ゆつて何のせいにや
問ハゆきハ素とく素とく素とく
ゆりて呼招りて素とく素とく素とく

トマ扱も胸をりて素とく素とく素とく
しして三日あつて終りて寛文
先妻素とく素とく素とく
常州高橋の城に女素とく素とく素とく
武夫とりし後つと名と横田保菴と素とく素とく素とく
ふり車ねを素とく素とく素とく素とく素とく
國のまにひりて素とく素とく素とく素とく素とく
愛する人の媒も素とく素とく素とく素とく素とく
後つとゆへにきりて睦しくすしはなすも

焰かのせりつらつとせめてハ今一といひ建て恨うらみでもうらん
とし女の身として数かず々の山川をえまうし
保かかん菴もろはりきりしなほいまゆくし辯ひらて結むすつて
そそりし一いねひもやう暇ひまの状さまをおろそけ漸すすり
あえへ飯いしそちりの後の書かきし子三人を設たてし
まうし直ただしつらり法はりて成なるれを保かかん菴も
かの嫉いひ妬やくの所ところ方かたにやと心こころをうりせりしおつに
あえの書かきれのもののでい煩わづらて身み悔くりしと
告つしうばあがり不便ふびんのりして結むす了しませんが西さいえ

へ越こせめてハ在ある跡あとのさうしに詰つて一いんんの女おんなのや
し家中うちの一いふ家いえさめていて床下とこより二里にりをかりし隔へて
いる寺てらまでしそかの墓かぶあつて新あらたんうゑに吊おり
しに不ふ思しぎヤ怪あやし固かちをく石いしの卒そと兎う婆ば俄に了しまり
歩あり倒たれ大地おほ音ねまでし云いふ破やぶりといふしや
保かかん菴あん影かげをかりてアナうらやめ結むすりて新あらたんを
女おんなでいりしてまぶさやとむを海うみにけし言いふ又またあ
まのまうりてまき痛いたむをかりし助たすてくれよらや
まのこ子こねあんと連つれぬ人ひととくまを妻つまの怨うらみを

と心付急書了りひらひりやとよ愛りて保菴を教
トてハ物と一多致に先を味へて了りてのみにち
かや理と致してあぶやうに成聖もいと事し
清ら海を人んよつらぬき縁はほきぬるやんや又
おの果もつす日あふ程いほひてありけりけり
告るしあれど急意の者るをこしにかの果れの人に
ひらひ能く保菴了り回心し書の媒ちりて
物もいあてハを向しと罰りて了りたれど
おそれ合しきけりへ眼もしに眼もハなりしと

也保菴ハ福あり程い成りて成りてありけり元禄
十のころの比りてありしと
眼婦蛇となる潜毒家と去
江戸是田河八町目紙屋右妻夫と恨りけり
はもと頼て終りてありしと
成覚寺了りおろりし
うは藤園の下りてを人むけり
おそ海しとありけり
罪させられを蛇まらまら生りて罪し

先づ家に入一とて又て嘆き合一とて家の内をハ
此の形もくばりて早女良とてひびしく其めに
おもいて至一とて女と呼入しに聖朝女遊之りし
とて其の言もあつて度くありしハ定ておぼし
侍るもまあるにやとりあつて

継子母了りさうい恨憂子と懣す

下野那須野の内下畦田村の駒八とて其者父ハ然
て継母のつりしにほく不孝なりし母のいさく
女今くめのもくふせき目了り逢すとも物了りハ

教いつりも頃ておぼいさうせんとい親一息の恐一

つりしそはさうも母もつかつて候了り候もつり
毎夜出立まりて懣せあるに候もつり候もつり
つりしとて候もつり候もつり候もつり候もつり
湯釜山の行人了りしとて彼が菩提と吊いあるとれ
うの王出立もつり候もつり候もつり候もつり

妻の魂遊まりて國了り候も

伊豫國宇和郡伊達宮内殿鞍一とて其者命
けりし妻もつり候もつり候もつり候もつり候もつり

